

南日本の衣料について (第1報)

—奄美の芭蕉布—

小林孝子

A Study on Clothing in Southern Japan (Report 1)

Bashofu Woven out of a Musa Genus Plant in the Amamis

Takako KOBAYASHI

I. はしがき

従来、芭蕉布については多くの紹介がなされ、特に沖縄の芭蕉布は、民芸的な立場から南方衣料としての用と美を高く評価されている。琉球王朝では慶安元年(1648年)始めて芭蕉当職が置かれ、さらにそれ以前から百官の朝服には芭蕉布が用いられていた。奄美においても、藩政時代は芭蕉布の朝衣を用いた。一般庶民の衣服もまた、当然各島に産する芭蕉布であった。

先年、私は徳之島において、奄美の芭蕉布の製作工程を記録する機会に恵まれた。この復原作業に従事した古老たちは農村の人たちであって、製作されたものは、庶民の日常着・仕事着に用いる

芭蕉布であった。都市的・上層的なものに比し、記録されることも少なく、大切に保存されることもなかった庶民の衣料の製作工程について、克明に記録できたのはまことに幸いであったと思う。

今回はこの下芭蕉と称する、太い糸で粗く織った芭蕉布の製作工程について報告する。



II. 奄美の芭蕉布

奄美諸島とは、現在奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島さらに与論島の5島を指している。すでに日本書紀には海見・阿麻弥の名が見出され、古来道之島と称し大陸や琉球と日本を結ぶ通路として重要な役割を果たして来た。

奄美の芭蕉布については、記録の一つに沖永良部渡航日記¹⁾がある。これは寛政11年(1634年)に沖永良部島代官を命ぜられて鹿児島を出船した種子島次郎左衛門の一行が、途中風待ちのために大島の宇検村に滞在したときの見聞を記したものであ

る。これによると「……女の内には手の首を見れば都てすみをつぎ又ばしやふじまの袖細のかたびらを左むねに着し、ばしやの縄を帯にし……」と記されている。また徳之島事情²⁾にも、島民の下層の衣生活について「……四時共に単衣又は芭蕉の白衣を着し……」「……農家の着する農衣は短尺の単衣芭蕉にして……」と記されて、仕事着には生地のみで、晴着には糸を染めて縞を用いたことが推察される。

III. 製作記録

1. 記録時期

昭和44年10月

2. 記録地区

大島郡徳之島町

3. 芭蕉について

衣料としての芭蕉は糸芭蕉と称するリュウキュウバショウである。バナナに似ているが、糸芭蕉の方は葉の伸び具合が直立に近い。この糸芭蕉の葉柄が集って茎のように見える葉鞘の部分から繊維をとる。この芭蕉を奄美では「バシヤ」と呼ぶ。古くは自生していたであろうが、衣料としての需要が高まるにつれて一つの財産と考えられるようになり、人工的に栽培されるようになって、島のあちこちに群生している。これを「バシヤ山」と称している。衣料として顧みられなくなった現在も各地でみることができる。

衣料として採集される芭蕉は、植付けてから3年以上経たもので、成熟して丈夫な繊維のとれる芭蕉は、表皮が白い皮で覆われて、経験者にはすぐ見分けることができる。

4. 葉打ち

芭蕉を切り倒す4～5日前に、長鎌を用いて葉を切り払う。(図1, 図2)

5. 芭蕉倒し

根元から切り倒す。(図3)

倒した芭蕉の根元を木片でたたき、剥ぎやすくする。(図17)

6. 芭蕉剥ぎ

根元を上にして、左手で芭蕉を支え、右手で1枚ずつ剥いでいく。(図18)

中心に近い部分の方が柔らかい上質の繊維がとれる。外側に向かうほど中、下、となって、一番外側は衣服用ではなく、縄などと同様に作業着の帯にしたり、蓆を織るときの糸に使う。

薩藩の直轄時代は、奄美諸島では貨幣の流通がなく、物品の価格は米で換算されていた。芭蕉についても例外ではなく、芭蕉1斤につき米何升換ということで、二升芭蕉・三升芭蕉という名称はそのまま芭蕉の品質、すなわち繊維の部位(内か外か)をあらわしたのである。

一枚ずつ剥いた带状のものを、2～3本まとめて束ねる。これをテルと称する籠に入れて山を下る。(図4)

7. 芭蕉煮

家に持ち帰ったものを鉄鍋に入れ、灰汁をかけて煮る。灰汁をつくる灰は、蘇鉄葉の灰などの白灰がよいとされている。(図5)

鍋の中には縄を敷き、芭蕉の束を並べる。煮る途中で縄を動かして芭蕉を上下に移動させる。煮えると赤褐色を帯びてくるので、鍋からとり出す。

8. 芭蕉梳き

クダというピンセット状のものを竹でつくる。(図6)

冷えぬうちに1.5cm くらいにひき割いて、クダでしごいて繊維だけを取り出す。(図7)

9. 乾燥

梳かれた繊維を、根元をそろえて竿にかけてかけ干しにする。一日くらいでよく乾燥する。(図19)

10. 繊維を束ねる

乾燥したものを100gr 程度の束にする。6束で1斤(約600gr)であるが、売買は斤単位であるため、1束1/6斤とは合理的でもあり、扱いやすい大きさでもある。

シュデナ³⁾と称する短い仕事着は経糸に1斤、緯糸に1斤で、1枚分約2斤の芭蕉を要する。

保存したり、売り歩くにはこの束のままであるが、糸績みに入る準備として、1束から6~7個のドーナツ型にまとめる。(図20)

11. 糸績み

ドーナツ型に巻いたものを水に浸して糸を細く割く。0.5cm 巾程度のものを7~8本に割き、つぎつぎにつなぐ工程を糸績みという。つないだものをヴンデという籠に入れて、一杯になるまで績み続ける。(図8)

糸績みは女の仕事で、主としてヨナベ仕事として行なわれた。また戸外に出て、数人で話し合いながら月光の下で糸績みすることが多かった。

12. 撚りかけ

ハタと称する糸車で撚りをかける。(図9)

13. ワクうつし

撚りをかけて竹管に巻きとったものをワクに巻きかえる。(図10)

14. 緯糸巻き

緯糸は撚りをかけずに竹管に巻き、球型になったものを竹管から抜きとって杼に入れる。(図11)

15. 整経

経糸の長さ和本数を決めるために、カシという機具に巻きうつす。(図12)

カシからはずした糸は、もつれぬように鎖編状にまとめておく。(図13)

16. 箴目通し

地機にかける準備をする。伸した経糸を箴目に通す。(図14)

一般の芭蕉布に用いる箆は、細目の場合は8ヨミ、太目の糸には7ヨミの箆を使用する。

17. 地機にかける

箆に通した糸をピンと張って、経巻に巻きとる。糸がからみ合わぬように、細い竹を巻き込んでいく。(図 15)

地機にのせ、足繩をかけ、織りはじめる。(図 16)

18. シュテナ

芭蕉布で仕立てた仕事着である。(図 21)

この上に縄や芭蕉のひもを帯として締めた。

シュテナまたはステナと称するが、袖無の意味を含んでいるのであろう。布1巾から衿を裁った残りの巾が袖巾となるので、衿が短いところから転じた名称であろうか。

IV. 奄美の芭蕉流れ

奄美には芭蕉流れ⁴⁾と称する民謡がある。単に歌謡としてだけでなく、祭の場で歌われている重要な意味をもつのであるが、ここでは芭蕉布の製作工程をうたい込んだ作業歌という意味で引用した。

お天道の下に、吾が植たる芭蕉や
青葉ガラガラと、萌たる清らさ

青葉ガラガラと、萌たる清ら芭蕉や
鎌ば取り寄して、倒しやる清らさ

鎌ば取り寄して、倒しやる清ら芭蕉や
元ば取り直し、剥ちやる清らさ

元ば取り直し、剥ちやる清ら芭蕉や
灰汁と鍋据して、煮ちやる清らさ

灰汁と鍋据して、煮ちやる清ら芭蕉や
竹管と竹籠据して、引ちやる清らさ

竹管と竹籠ゐして、引ちやる清ら芭蕉や
竿ば取り寄して、干しやる清らや

竿ば取り寄して、干しやる清ら芭蕉や

績籠ぬ中に、績だる清らさ

績籠ぬ中に、績だる清ら芭蕉や
紡車と錘寄して、紡ぢる清らさ

紡車と錘よして、紡ぢる清ら芭蕉や
藍染め生藍染め、染めたる清らさ

あじら芭蕉新芭蕉、碁盤綾ひらて
愛し子に着せて、み袖振らそ

V. あ と が き

「芭蕉布は汗を弾いて涼しくその上保ちがよく真夏用の着物としては並ぶものなき理想品である……ばしょう流れの歌には、自分の必要に応じて物を製造するという自給と創造のよろこびが汲み取られる……」⁵⁾とされながらも、現在奄美の島々では芭蕉布製作は行なわれなくなってしまった。理由の第一はあまりにも時間と手数がかかりすぎることであろう。袖も着丈も短いシュデナですら一枚分の糸を績むためには、連日績み続けても十日くらいは要したというし、芭蕉梳きだけでも二日かかるので、毎年家族の衣類を調整する女子の仕事は大変なものであった。明治以降木綿糸の入手が容易になるに従い、また、近年特に繊維製品の多種多量生産や既製服普及の時代を迎えるに至って、全く衰微したものと考えられる。

芭蕉布は南日本における木綿以前の衣料であった。それが夏の衣料として残り生き続けてきた。また一方、この原始衣料が都市的・上層の衣料にまで発達した例は特異なものといってもよかろう。理由は上納品として染織技術の向上が求められたことにもよるであろうが、何といっても、風土的特性が生かされたことが第一の理由であろう。

芭蕉が衣料に供せられなくなった現在も、奄美の各地で芭蕉山が放置されたままになっている。何れは破壊されるその日を待つのみであろうか。離島開発といえば近代産業誘置が通例のようにみえるが、近代産業はまた幾多の公害附随を覚悟せねばならぬ。奄美の自然を破壊しないためにも、民俗資料の保存のためにも、芭蕉布が現代の夏季衣料としてよみがえることを望みたい。

なお、本記録は主として徳之島における記録であるが、今後地域をひろげて考察を継続したいと思う。

本稿は昭和46年10月24日第12回日本風俗史学会総会で発表したものの1部である。

終りに、この記録のために御協力下さいました徳之島町の松山氏御一家をはじめ、御世話いただきました多くのかたがたに深く感謝します。

参 考 文 献

- 1) 鹿児島県大島郡和泊町：“沖永良部島郷土史資料”，225（昭43，1968）.
- 2) 名瀬市史編纂委員会：“徳之島事情”，30（昭39，1964）.
- 3) 徳之島町誌編纂委員会：“徳之島町誌”，678（昭45，1970）.
- 4) 5) 文英吉：“奄美民謡大観”，79～83（昭41，1966）.



図1 葉 打 ち



図2 葉 打 ち

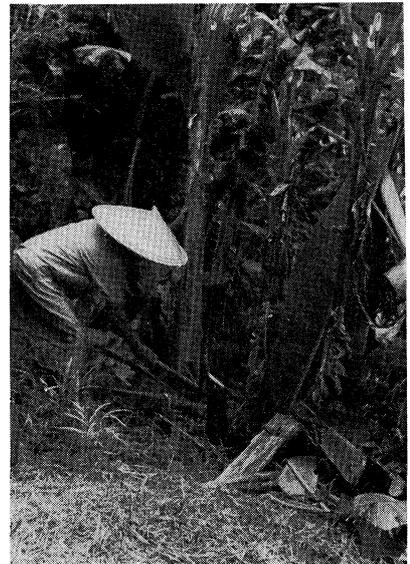


図3 芭蕉倒し

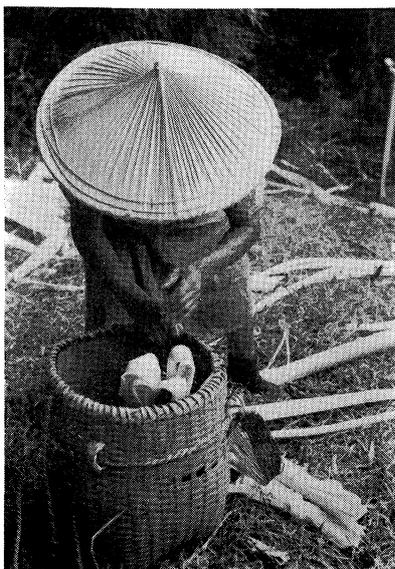


図4 束にして運ぶ

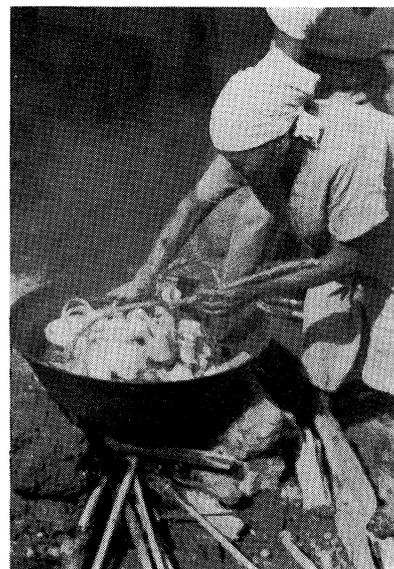


図5 芭蕉煮

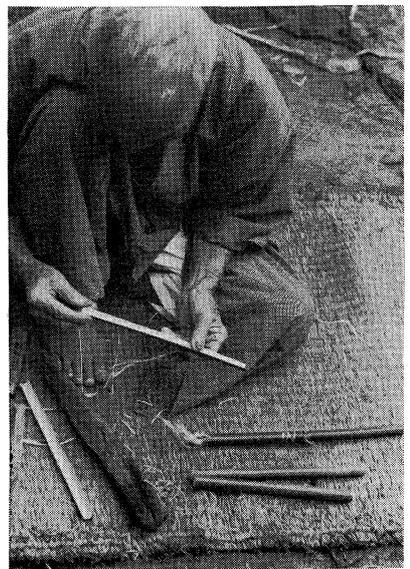


図6 クダつくり



図7 芭蕉梳き

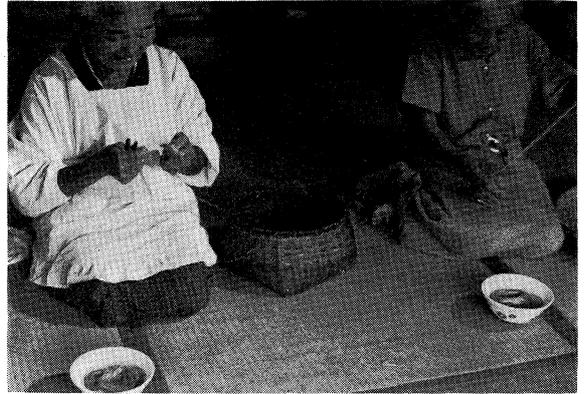


図8 芭蕉績み



図9 撚りをかける

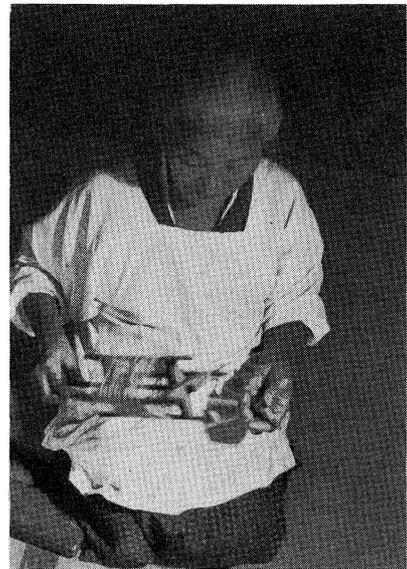


図10 ワクにうつす



図11 緯糸巻き

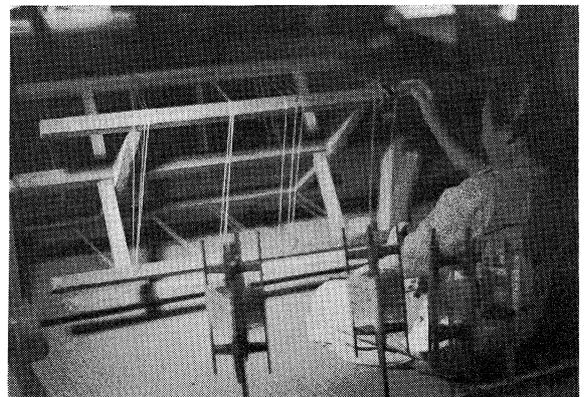


図12 整 経



図13 鎖編状の経糸

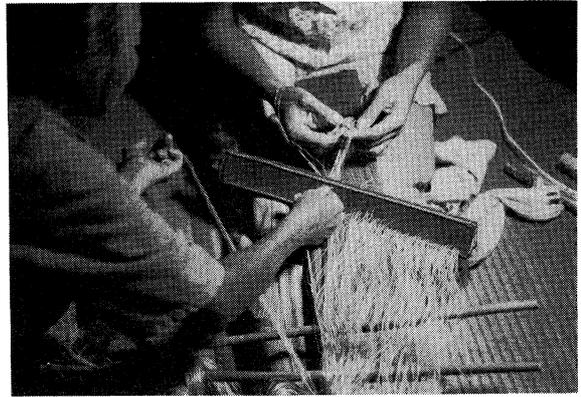


図14 箴目通し

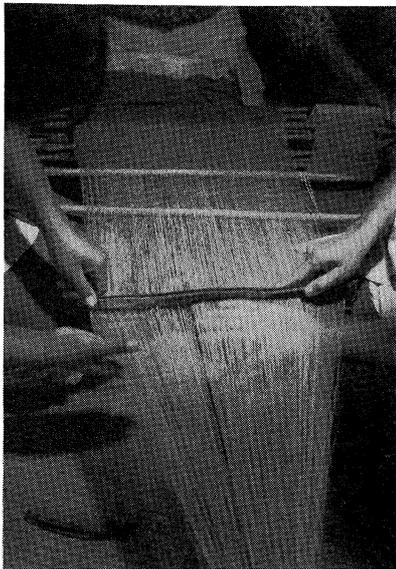


図15 経卷に巻く

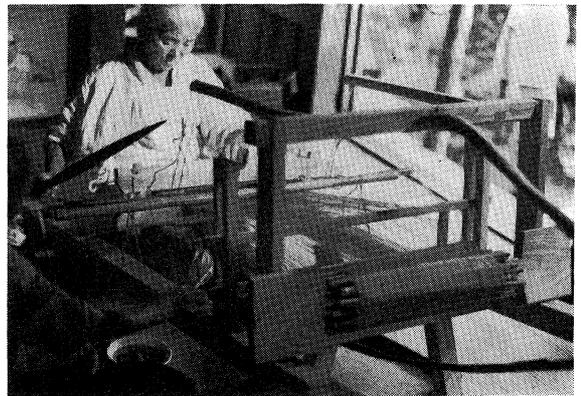


図16 地機



図17 根元をたたく



図18 芭蕉剥ぎ

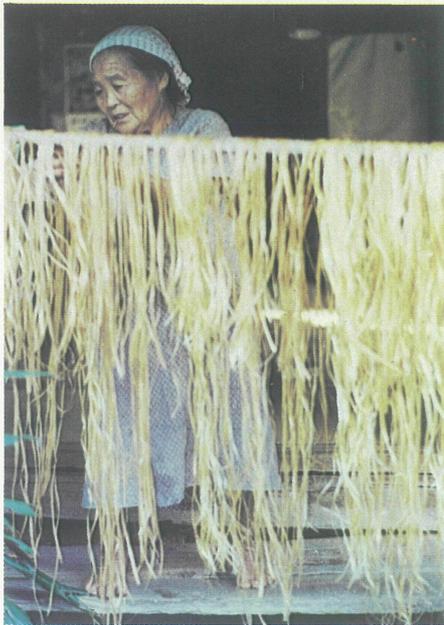


図19 乾 燥



図20 乾燥したものをまとめる

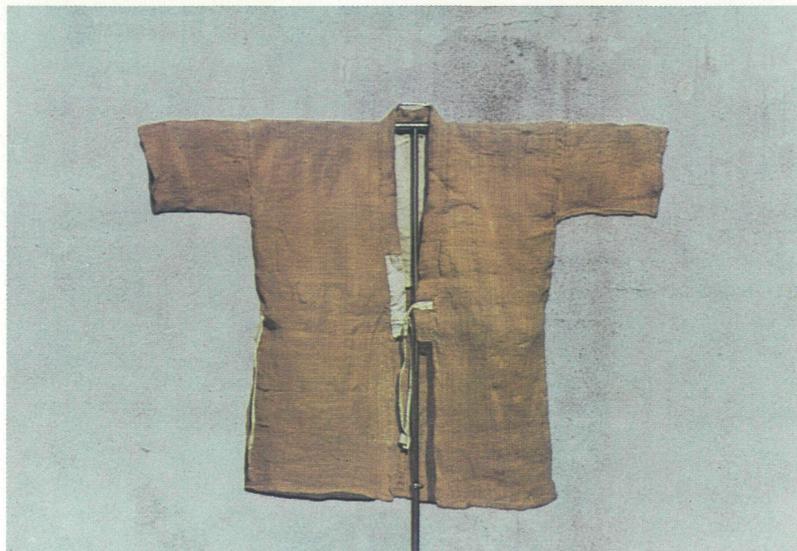


図21 シュデナ